

【事例紹介】 31 歳 男性 MSM

26 歳頃から痔出血で、時折近医の肛門科に通院していた。先月末、肛門痛と発熱で受診したところ肛門周囲膿瘍と診断された。術前の検査で HIV 抗体陽性と判明したため、手術は延期され、紹介にて当院受診となった。「診療情報提供書」には 24 歳と 27 歳で梅毒治療、28 歳で急性 A 型肝炎のため入院加療と記載されている。

当院初診 CD4 数：380/ μ l、HIV-RNA：2.4×10E4 コピー/ml

初診時面談（問診）で、さらに以下のことが分かった。

- ・ 29 歳で尖圭コンジローマ（焼灼術実施）もあった。
- ・ パートナーはおらず、出会い系アプリで相手を探し週末になるとハッテン場に行っている。
- ・ コンドームは相手が使いたくないという場合は使っていない。

今回（2 回目受診）の面談で看護師は、性感染症の罹患歴を話題にして性感染症予防のための支援を行おうと考えている。

次のページ以降は指示があるまで
見ないでください

《1回目映像スクリプト》

看護師：こんにちは…診察はいかがでしたか？

患者：まあ、特に…今日もう一回採血して、その結果をみて治療をどうするかって感じみたいです。年内に始めるのかな？ちょうど年末年始の休み中に始めるなら都合はいいんですけど、そういうのできるんですか？

看護師：できますけど、病院もお休みなんで、副作用とか何かあった時には救急外来で対応させてもらうことにはなりませんけど。

患者：そっちもそうだけど、こっちも早く手術したいんですけどね…とにかく痛くて（肛門のこと）。

看護師：ウイルス量が多いままだと手術できないのでね…順番的にはHIVの治療が先になりますね。お尻が痛いといういろいろ大変ですか？

患者：いろいろ大変です（笑）。

看護師：いろいろって、まあ、あっちの方はどうですか？とてもできない感じ？

患者：あっち？…いや～、それどころじゃないですよ。電車や職場だって座ってられないですもん。無理無理。

看護師：じゃあ、最近は何してない？…

患者：できません（笑）。

看護師：そうですか…いや～、これまでたくさんの性感染症にかかってこられてるので、これからも同じことを繰り返してはダメなので、とにかく予防をしてもらわないといけないって、今日はね、その話を…

患者：あ～それですか、それなら大丈夫です。そもそもやれないし（笑）。

看護師：あの、今だけのことじゃないですよ。お尻が治って、またしたくなったら、今度はHIVを相手に移す可能性もあるし、自分もまた病気をもらって大変になる可能性もあるから…

患者：大丈夫、大丈夫。分かっていますって、ゴム使えってことでしょうか？

看護師：う～ん、コンドーム…、使ってますか？

患者：使いますよ、使います。っていうか、使ってもらいます（笑）。

看護師：使ってもらっていても、大丈夫です？相手次第だとちゃんと使ってもらえるか…

患者：最初から使ってもらいますよ。とにかく、入れる前につけてもらえばいいんでしょ？

看護師：ん～、ハッテン場で知り合う相手だと、なかなかその辺は難しいって聞きますけど…

患者：大丈夫、大丈夫。分かっていますって。

看護師：ハッテン場とはとにかく危険なので、そもそもそこへ行くこと自体やめられないですか？

患者：行ってませんで、こんなお尻じゃ行けるわけないでしょ。

看護師：でもね、お尻も治療して元気になったら、また行きたくなくないと思いませんか？

患者：その時は、コンドームをちゃんと使ってもらいますから、大丈夫です。

看護師：ハッテン場に行くのはやめて、誰か特定のパートナーを作ればいいのに。そういうのダメですか？興味ないです？

患者：興味ないとかじゃ…（だんだん話すのがいやになってきている感じ）

看護師：じゃあ、作ればいいじゃないですか？もてそうだし、すぐいい人できるんじゃないですか？

患者：…仕事が忙しくてそんな暇ないですよ。…そういうのなんか面倒くさいし。

看護師：とにかく不特定の相手とコンドームを使わない行為が何回もあればあるほど、また病気になる可能性が高くなるわけです。だから、これまでみたいにハッテン場に行ってやる、みたいなのはやめた方がいいわけです。

患者：じゃあ、やめますよ、ハッテン場行くの。

看護師：やめられます？本当に？それはやめた方がいいですよ、絶対に。でも、そう簡単でもないでしょう？本当にやめられるんですか？

患者：はいはい、だからやめますって。行かない方がいいんでしょ？

第30回日本エイズ学会認定講習会（看護）

シンポジウム13 ケアにつなげる面談技術～性感染症に関する面談について～

資料

看護師：そうです、そうです、そうしましょう。

患者：…もう、いいですか？

看護師：はい？

患者：もう、今日はいいですか？これで…

看護師：え〜っと、そうですね…（カレンダーを見ながら）次回は…

患者：12月16日です。

看護師：3週間後ですね。

患者：来月は23日が休みで、その次の週はもう年末だから、1週早めました。

看護師：そうですね、じゃあ次回12月16日に、またお話ししましょう。

患者：…

Q1：この面談の改善点とその理由を考えてください

次のページは指示があるまで
見ないでください

《2 回目映像》

看護師：こんにちは…診察はいかがでしたか？

患者：まあ、特に…今日もう一回採血して、その結果をみて治療をどうするかって感じみたいです。年内に始めるのかな？ちょうど年末年始の休み中に始めるなら都合はいいんですけど、そういうのできるんですか？

看護師：できますよ。仕事がお休みだと治療も始めやすいですね。病院も休みですけど、副作用とか何かあった時にもその日の担当者が対応させてもらいますから、上手に自己紹介してもらえば大丈夫ですよ。

患者：そっちもそうだけど、こっちも早く手術したいんですけどね…とにかく痛くて（肛門のこと）。

看護師：ウイルス量を減らして、CD4 を増やしてから手術した方がいいので、順番的には HIV の治療からということになりますね。お尻が痛いといろいろ大変ですか？

患者：いろいろ大変です（笑）。

看護師：いろいろっていうと…エッチの方はどうされてます？

患者：ん？エッチ？…いや～、それどころじゃないですよ。電車や職場だって座ってられないですもん。無理無理。

看護師：痛くて無理ですか、じゃあ、最近はする気にならない？

患者：とてもする気になりません（笑）。

看護師：そうですね…でも、これから HIV の治療、お尻の治療と順番に治療をしていくと、どんどん元気になっていく方向なので、むしろエッチしたい気持ちになって当然なんです。それが「元気になってきた」「回復してきた」というバロメーターになるということもあると思うんですよ。

患者：え～そうなんですか？（笑）それ困ったなあ～（笑）

看護師：困りますか？（笑）

患者：だって、この病気になったらしない方がいいでしょ？うつしちゃうかもしれないし。

看護師：うつしちゃうかもしれないと思ってるんですね…

患者：だってハッテン場でコンドーム使おうなんて言ったら、それこそ怪しまれるし、あそこでゴム使おうなんて人はいませんいから。

看護師：ゴム使おうとはなかなか言えない場所なんですね。

患者：だから予防は無理ですよ。「予防にはゴム」って知ってますよ。だけど無理ですね。

看護師：ゴムを使うのは無理ですか…でも、ゴムを使うのは相手にうつさないためだけじゃないのはご存知ですか？（患者は少し首をかしげる）自分の身を守る、自分が性感染症にならないためでもあるんですよ。

患者：ああ～

看護師：以前と違って今度からは自分が HIV に感染しているから、今度性感染症にかかったら、もっと大変だと思いますよ。梅毒感染が今増えてますけど、HIV 感染症の人が梅毒にかかったら、進行が早くて重症化しやすいことが分かってますから。

患者：う～ん、そうかもしれないけど…でもゴムは使えないですよ。予防は無理ですね。

看護師：無理ですか…どうしても無理なんですね。

患者：ハッテン場はそういうところだし…ゴム使おうとは（言えませんよ）…もう相手次第ですから…

看護師：う～ん…

Q2：この面談をこれからどのように展開していくか、そのねらいや留意点を考えください。

映像の解説

《1回目映像》

【看護師】

設定：看護師は、患者が何度も性感染症を経験しており、絶対に性行動を変えないと自分にとっても相手にとってもリスクがあると思い、どうすべきかについてどんどん説明する。性行動を変えさせようと、批判的、否定的な表現をたくさん使う。

映像に盛り込んだ具体的なポイント：

①指導モードで説明する

- ・最初から否定的な語り口（年末年始の休み中に始めることも否定的なニュアンスで受け止めている）
- ・批判的な切り出し（何度も性感染症にかかっているから）
- ・何とかしたいと思うあまり一方的な提案になっている

②患者の反応に関わらず話しを続ける

- ・だんだん嫌気がさしている反応（患者の上体が後ろに離れていく、口調のトーンが下がる、硬い表情、ため息）に気付かない
- ・看護師が話し終わる前に（かぶせるように、さえぎるように）話していることに気付かない
- ・肛門の痛みがあり座り心地悪そうな様子（座る角度を変える）に気付かない
- ・患者が「ゴム」と表現しているのに「コンドーム」と言い通す

【患者】

設定：患者は、注意モードの看護師に対し、めんどくさくなって面談を早く終わらせたい気持ちになり、自分のことを話す気はなくなり「分かっている」「大丈夫」「やめます」という主張を繰り返す。

映像に盛り込んだ具体的なポイント：

①注意を警戒して話したがない

- ・指導や説明に「はいはい」「ちゃんと予防している」「分かっている」と適当に反応し、指導は不要とアピールする

【ディスカッション】

この面談の改善点とその理由を考えてもらう

【おさえておきたいポイント】

コメンテーターより：

- ・性行動は欲求のひとつとして止めること、直すことは出来ないものだと、看護師がまず理解することが重要。
- ・そして、どう予防をしながら行動するのか、これから先どのような生活をしていきたいのか、そのあたりも含めた性行動について、患者が考えて話せる機会を作ることから始める。
- ・「初診時」「内服開始時」「生活パターンが変わったような時」「パートナーが出来た時」などの時には、積極的に予防行動について話を聴く機会を設ける。
- ・性感染症に関しては、パンフレット等を用いて罹患した場合、どういうことになるかなどの情報を伝える。
- ・患者の言葉を使うこと（患者が「ゴム」と言ったら「ゴム」、「スキン」と言ったら「スキン」で話を進めるなど）で、その患者に合わせた指導や話しやすさ、雰囲気を作ることができる。患者も医療者が同じ言葉を使えば、患者を理解することにもつながる。
- ・患者も看護師も、性について話しづらさを感じる場合には、日常生活の中からリンクさせて話題を作っていくのいいのではないかと。

受講者より：

- ・看護師主導の面談となり、看護師が聞きたい内容だけになっている。そのため、患者が現在、もっとも苦痛を感じている身体的な症状の緩和については、ほとんど話題に上っていない。
- ・外来受診 2 回目の面談なので、患者との信頼関係を築く時期であり、患者の表情や会話にもっと注意を払い、話題として何をどのように取り上げるかを考える必要がある。
- ・看護師のアドバイスが中心になっているため、患者の気づきや患者の思いを引き出すことにつながっておらず、患者との間に壁を作ってしまった。
- ・看護師がセックスを“あっちの方”と表現した言葉などから、看護師のセクシュアリティに対する価値観が見える。言葉の使い方に配慮しながら、患者の言葉を引き出す工夫が求められる。

《2 回目映像》

【看護師】

設定：最初は、患者の考えを聴く姿勢で入る（説明や批判は避け、前向きな受け止めをして返している。性感染症の予防についての導入にも笑顔がみられ、明るい感じで始まる）。しかし、後半では新たな二次感染リスク（相手に HIV 感染させるリスク）に気付かせたり、患者の発言を受け止めたりして、なんとか患者の行動変容につながるヒントを得ようとするが、「予防はできない」と繰り返す患者に対し、このままどう展開したらいいか困って黙ってしまう。

映像に盛り込んだ具体的なポイント：

- ① 前向き、肯定的な説明
 - ・年末年始に治療を開始するという話も、前向きに受け止め、どうすればうまくいくかを伝えている
 - ・性感染症の話題に入るところも明るい感じで入れている
 - ・患者が「ゴム」というのをうけて「ゴム」で話を進めている
- ② 患者の話を受け止めている
 - ・患者の言葉を受け止めることで、患者自身が自分の考えを語りだしている（話をさせられているのではない感じ）

【患者】

設定：予防が大事と理解しているが、できていない、できない難しさがあり、気まずさを感じている。

映像に盛り込んだ具体的なポイント：

- ① 予防できない理由を自然と自分から語る
 - ・看護師が批判的、拒否的でない雰囲気があり、難しい理由を自ら説明している
 - ・無理なのに「やります」と言ったりせず、本音が語られている

【ディスカッション】

この面談をこれからどのように展開していくか、そのねらいや留意点を考えてもらう。

【おさえておきたいポイント】

コメンテーターより：

- ・1 回の面談で結果（行動変容など）を求めるものではないことを看護師が理解しておき、このことに関する話し合いが続けられることを目指す。（つまり、この回で何か解決策が得られなくても「難しいんですね」で終わっても良いということ）
- ・話し合いを継続する中では、新たな感染をしないためには、感染予防が必要であることを伝えるが、単に予防行動が

できた、できていないという行動評価で終わらないようにする。患者が行動する、または行動に至ったなどの理由があるはずなので、そこを確認し、自身の健康を考えた性生活についてどのように考えているか、リスクを回避するまたは軽減ができない、支障をきたしていることが何かを一緒に考えて方策を検討する。

- ・病院の医療者との関係だけで性感染予防にアプローチするのは難しいので、患者同士と話し合ったり、陽性者支援をしている NPO などにつなげたりするなど、別の資源を活用することも検討する。

受講者より：

- ・患者が「できない」と繰り返すので看護師は何を言えばいいか困っているが、例えば「ハッテン場にはどれくらいの頻度で行くのか？」とか、「ゴムを使って欲しい時、どんな風に言えばいいと思うか？」など、患者自身が考えるような質問をして、徐々にできるように（できるような気持ちに）していく。また、こういう質問をすることは、患者の考えを知ることになり、できそうな方法へ発展するのではないかな。
- ・コンドームを使ったこともあったのではないかと推察できるので、その時のことを一緒に振り返ると次につながる何か気づきが得られるのではないかな？
- ・性感染症の予防から直球で面談を始めるのではなく、例えば肛門膿瘍の術前術後の生活で気を付けることなどから話を始めて、徐々に性行動へ近づけてく。
- ・患者には、自分の身体を大切にしたいというメッセージを大前提として面談を進める。
- ・看護師として医療情報（性感染症に罹患したらどのような症状や経過をたどるかなど）をもっと提供する必要があるのではないかな。また、患者は自分の性行動や性的指向については、看護師よりもよくわかっているので、患者としての専門性を尊重し、お互いに教え合うような関係で面談を進めても良いのではないかな。
- ・出会い系アプリを使っているが、そこでは「ゴムを使わない人は NG」などのメッセージを付けて探すことができるので、出会い系をだめというよりも、そのような工夫でより安全な方法を提案してみる。

全体の質疑応答より：「患者が継続受診するために配慮していること」について

- ・外来受診を継続してもらうことが大事なので、性感染症の予防に焦点をあてすぎて、受診中断につながるということは避けなければならない。そのため、例えばこの面談例のように、受診 2 回目であればその回までに作った患者－看護師関係を踏まえて、性感染症予防が話題にできるように進めていく。その基本は、一方的な指導ではなく「対話」である。
- ・受診継続を支援するにあたり、患者との信頼関係が必要となる。面談が患者にとって不快なものになると、外来は患者の本心を話せる場所ではなくなり、受診中断につながる可能性がある。そのため、患者が受診する場所、看護師と面談する場所が、安心できる場所である（と感じられるようにする）ことも大切である。
- ・面談しながら患者の反応や様子を丁寧に観察し、どのように進めていくかはアセスメントし、判断して加減していく。そして、場合によって、看護師主導で進めたり、患者主体で進めたりなど、対応を変えていく。
- ・その日の面談などで次回までの目標を作り、その目標が達成されたか、経過を確認するためにも受診を促す。もし受診中断となった場合は、受診再開時に中断を批判するのではなく、受診再開を受け入れる姿勢でいることを伝える。

以上